自分資源×地域資源／若者の仕事作りに新方程式

谷口吉光（秋田県立大学）

本欄（11 月 20 日付）で紹介したように、この冬、男鹿市で「男鹿・ローカルビジネス・デザインスクール」という若い人向けの仕事作りの塾を開いた。

いわゆる起業家養成塾ではなく､「自分資源と地域資源を組み合わせて小さな仕事をたくさん作る」という、これまであまり例のないコンセプトの塾だ。「半農半Ｘ」で有名な塩見直紀さんが京都府綾部市でやっている取り組みを参考にさせてもらった。

やってみて、重要な発見がいくつかあったので報告したい。

ひとつは男鹿南秋地域にもＩターンやＵターンの若者がかなりいるということだ。そのなかには秋田の農村に魅力を感じている「田園回帰」と呼ばれるタイプの若者たちも含まれている。

自分の持っている資源を短時間に何十も書かせる「自分資源の棚卸し」というグループワークをやってみたところ、本当に多彩な経歴と個性を持った人たちだということがわかった。

特に印象に残ったのは、「あなたにとって男鹿の魅力は何ですか」と聞いた時、「ゆっくりした時間が流れている」とか「生きていくのに必要なものがそろっている」など、地元の人が見過ごしている点を魅力だと感じる新鮮な感性を持っていたところだ。こういう若者にぜひ定着してもらい、地域のために活躍してもらうべきだと強く感じた。

しかし、現実には彼らを受け入れる市町村の支援は十分ではなく、不安定な状況に置かれている人が多いようだった。集落に家を借りて住んでいるものの、住民にきちんと認知されておらず、落ち着かない思いをしている人もいたし、U ターンして起業の準備をしているが、市町村から何の支援も受けていない人もいた。

「移住」が新しい課題であるために、県や市町村もどういう支援をしたらいいのかわからないのかもしれないが、集落の住民リーダーと連携し、地域の大事な担い手になりうる人材としてケアすることが必要だ。

３つめに、今回の塾の手法を使うと、普段地域資源として出てこない多様な場所、物、人、行事などをピックアップすることができ、それを新しい仕事の素材として活用する可能性を開くことができる。

たとえば受講生に男鹿の地域資源を挙げてもらったところ、「船川からの朝焼け」「安全寺のすべて」「真山付近の食べられる土」「しんつつみのクコの実」など謎の資源がたくさん挙がってきた。見るからに「何だろう」と思わせるのは、これらが単なるモノとしての資源ではなく、受講者の思いに彩られて物語性を帯びているからだ。

自分資源と地域資源をたくさん挙げさせ、それを組み合わせて仕事のタネを考えるというワークをすると、手探りながら受講生全員が新しい仕事をイメージし始める。今回の塾は男鹿南秋のように目立った産業がない地域における仕事づくりには有効性があることがわかった。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2017 年 3 月 20 日掲載分に加筆・修正した）